



大阪+知的障害+地域+おもい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3901 号 2017.9.16 発行

ANA 車いすに見る未来を見据えた障害者対策

毎日新聞 2017年9月16日



体格の大きな人向けの車いす(右)とリクライニング可能な車いす=東京都大田区の羽田空港で、米田堅持撮影

全日本空輸(ANA)では、障害をもつ乗客への対応に力を入れている。保安検査場の金属探知機を通ることができる樹脂製の車いす(2016年導入)は全国の空港に約200台配備され、残る約200台の金属製車いすも19年度末までに入れ替える予定だ。20年東京五輪・

パラリンピックの「オフィシャルパートナー」としてという意味合いもあるが、その後を見据えた取り組みでもあるという。車いすを例に、ANAの次の時代への対応策を探った。

【米田堅持】

さまざまな種類の車いす

ANAでは一般的に使用される樹脂製の車いす以外に、特別な車いすも用意している。

「まだ10空港で10台ですが、これから増やしていく予定です」

身障者対応を担当するCS&プロダクト・サービス室の小島永士さんは、空港用リクライニング車いすの存在を教えてくれた。座面をフルフラットにできる車いすで、フルフラット時の全長は約200センチ、座席幅40センチ。機内には入れず、フルフラットのまま移動はできないが、長時間座ったままの姿勢を保つのが困難な人のために用意されている。座席幅38センチで機内に入れるタイプもある。

導入のきっかけは、空港や搭乗口などで何度も車いすを乗りかえる必要があり、乗客の負担が大きかったため、現在は東京・羽田や北海道・千歳、大阪・伊丹、福岡、沖縄など主な空港にしかないが、順次増やしていくという。この他にも、樹脂製車いすでは納まらない大柄の人のための空港用大型車いすや、機内用大型車いすも用意されている。

また、飛行機の搭乗口との段差をなくすボードや、空港によっては車いすのままタラップを上がる装置などもある。これらは航空会社で用意することが多いため、会社によって対応は異なる。

次の時代に向けた布石

東京五輪をにらんで、ANAは昨年からの障害者向けサービスへの取り組みを強化してい

るが、東京五輪・パラリンピック向けという短期的な面だけでなく、顧客の年齢層の変化に備えた中長期的な取り組みという側面も持っている。

「高齢のお客様が増えたから対策をしましょうでは遅い。今は非日常でも、将来の日常に備える必要がある」と小島さんは語る。

現在のANAの乗客は30～50歳代が大半を占めており、鉄道など他の交通機関へ流れている高齢者の取り込みも課題だという。少子高齢化の影響もあり、30～50歳代の顧客の増加は見込めず、現在の主要な顧客の高齢化が進めば、車いすなどのニーズが高まると予想している。

小島さんは「欧米では樹脂製車いすこそないが、専門スタッフが手厚い対応をしている。健常者と障害者が区別なく利用できるようにすることは、グローバル対応の一環でもある」とバリアフリー対応の意義を強調する。空港での対応については「設備によって異なるが、可能な限りの対応をするので、車いすだけでなく、サポートを必要と感じたら予約時に遠慮なく相談してほしい」と話している。

高齢者・障害者の旅支援 「バディケアスタッフ」業務開始



信濃毎日新聞 2017年9月16日
プールから出てきた参加者（左）から使用済みのタオルを受け取り、温泉の場所を案内する坂口さん。「受け取りますよ」などと積極的に声を掛けた

高齢者や障害者の旅行に付き添い健康管理を手伝う新しい民間資格「バディケアスタッフ」の取得者が今月、業務を始めた。長野県上田市で昨秋発足した一般社団法人「日本バディケア協会」が今年4月から市内と都内で開いている養成講座を受け、これまでに県内外で25人が資格（3級）を取得。今後もさらに普及を進め、年齢や障害の有無を問わず誰もが楽しめる旅行、ユニバー

サルツーリズムを広めようとしている。

バディケアスタッフは体調を気遣う声掛けや見守りをしたり、足の疲れを取ったりして、依頼者の旅行をサポートする。養成講座では看護師らを講師に、高齢者の体調の変化に気付くためのポイントや車いすの扱い方などを学習。資格は技能に合わせて1級から3級があり、このうち基本技術を習得する3級は計6日間の座学や実習がある。

資格取得者は、宿泊施設に勤める人、看護師、主婦などで、20代～60代の幅広い年代にわたる。協会は、自分で歩行ができる人が対象の場合で1時間1300円からといったサービスの価格の目安を定めている。

今月9日には、資格取得者2人が同市鹿教湯温泉のホテルで初業務。股関節に障害がある人やその家族ら計約50人が1泊2日で「水中ポールウォーキング」などを体験するツアーに付き添った。バディケアスタッフは、プールから上がった参加者に水分補給を勧めたり、段差につまずかないよう声を掛けたりした。

スタッフと接したツアー参加者の新村米子さん（70）＝神奈川県座間市＝は「温かい気遣いにほっとした」。友人の金井みどりさん（64）＝相模原市＝は「サポートしてほしいと思う前に対応してくれる心配りがうれしい」と喜んだ。

3月まで作業療法士として病院に勤め、この日初業務に臨んだ坂口辰伸さん（61）＝上田市富士山＝は、外出をおっくうに感じている障害者らを支援したいといい「さりげないことかもしれないが、臨機応変な対応が求められる」。看護師でバディケアスタッフを考案した吉田美佐代さん（50）＝同市野倉＝は「旅行支援の知識や技能は、災害時に避難誘導する際にも役立つ」と話している。

パディケアスタッフについての問い合わせは平日午前9時～午後6時に日本パディケア協会事務局（電話0268・75・7692）へ。

障害者スポーツ指導の即戦力に 草津で講習会

中日新聞 2017年9月16日



片足立ちをして、全身の力の入り方を確かめる受講者たち＝草津市笠山の県立障害者福祉センターで

障害者スポーツの指導者を養成する四日間の講習会が十五日、県立障害者福祉センター（草津市笠山）で始まった。県では、二〇二四年の滋賀国体に合わせて開かれる全国障害者スポーツ大会（全スポ）に向けた競技力向上が急務。関係者は、健常者を指導している人にも参加してもらい、障害者スポーツでも指導できる即戦力になってもらえればと期待している。

日本障がい者スポーツ協会（日障協）が主催し、全国から三十七人が参加。十八日まで障害の種類や特性、競技ごとの指導法などを座学と実技の双方で学ぶ。その後、現場で研修し年内に報告書を提出すると、現場での指導を担う「中級障がい者スポーツ指導員」として認められる。

初日はセンターの増田圭亮専門員が「障害のある人は、まず力の入れ方が分からない場合も多い。難しい言葉を使わず、みんなで一緒にやりながら説明することが大切」と説明。続いて、手や足でボールを持ち上げて隣の人に渡すなど、障害者も一緒に楽しめるトレーニングの方法を実践した。日障協の滝沢幸孝スポーツ推進課長は「障害の有無にかかわらず、地域で一緒にスポーツを楽しむ環境をつくるのが大切」と話す。

今回の特徴は、健常者を指導している日本体協公認の指導者の参加だ。東近江市で、タックルの代わりに腰に付けたタグを奪い合う「タグラグビー」を指導している西山英二さん（64）は、発達障害児などを受け入れる中で「個人の特性を理解して、健常者も障害者も垣根なく参加できる団体にしたい」と、受講を決めたという。

障がい者スポーツ指導員は県内に三百人ほどおり、県は二〇年までに三百四十三人に増やす目標を立てているが、実際に指導に携わっているのは有資格者の二割ほど。県は全スポで二百人の選手団を計画しているが、県障害者スポーツ協会の伊勢坊美喜主査は「（そのためには）まだまだ多くの指導者養成が必要」と話した。（野瀬井寛）

障害者トライアスロン 谷真海が日本勢で初優勝

NHKニュース 2017年9月16日

障害者のトライアスロン、パラトライアスロンの世界選手権が15日、オランダで開かれ、谷真海選手が優勝しました。

日本トライアスロン連合によりますと、谷選手はみずからを含む3人が出場したレースで、2位に32秒差をつける1時間18分18秒で優勝しました。日本勢がパラトライアスロンの世界選手権で優勝するのは初めてということです。

35歳の谷選手は走り幅跳びでパラリンピック3大会に出場し、4年前のI O C＝国際オリンピック委員会の総会では、東京オリンピック・パラリンピックを招致するプレゼンテーションにも参加しました。

谷選手は去年、パラトライアスロンに転向していて、レース後、「ことしいちばん大きな目標としてきた大会で優勝できてうれしい。もっと強くなれると思うので、来年以降も強くなって再び大会に参加したい」と話しています。

亀山トリエンナーレ 知的障害者の菅尾さん出展 描きたい思い、まっすぐに 精密線画、

独自の作風 / 三重毎

日新聞 2017年9月16日

知的障害者らが芸術活動に励む名張市百合が丘東9の通所施設「ワークプレイス葉（しおり）」の菅尾博司さん（49）＝同市桔梗が丘6＝が、亀山市で24日から始まる現代美術展「亀山トリエンナーレ」に出展する。精密な線描で対象を表す独自の作風が評価され、健常者に交じって臨んだ昨年秋の審査を通過。開幕直前まで新作の制作に取り組んでいる。【竹内之浩】

出展作を披露する菅尾博司さん（左）と森敏子さん＝三重県名張市で、竹内之浩撮影

亀山トリエンナーレは3年に1度開かれる県内唯一の公募による現代美術展で、10月15日まで開催。



発達障害の子の夢をアシスト 元Jリーガー・相馬崇人さん、第二の人生

東京新聞 2017年9月16日

発達障害の子ども向けデイサービス施設を運営する相馬崇人さん＝神戸市で

サッカーの元日本代表候補でJ1神戸を昨季で引退した相馬崇人さん（35）が、新たな道を歩んでいる。今年から発達障害の子どもたちを支援するデイサービスを運営。プロの世界で夢を追いつづけた実体験から「諦めず、夢を追う子を育てたい」との思いで第二の人生をスタートさせた。（対比地貴浩）



デイサービスは今年2月に神戸市内で始め、現在

は他県を含め3カ所で展開。計50人ほどが利用しているという。きっかけは現役引退前、2009年から3シーズンをポルトガルやドイツのクラブで過ごしたころにさかのぼる。

当時、長男の育児を通じて現地の幼児教育に触れた。ドイツの保育園では、歌や外遊びなどのカリキュラムの組み合わせを子ども自身で選択。積み木などの遊具も、建築の仕組みを学べる工夫が施されていた。自主性を重んじ、「考える力」も育む手法に「日本と全然違う」と驚き、興味を持った。

帰国して神戸に加入後の11年、しつけなどを学ぶ幼児教室「そうまハウス」を開設。欧州での経験を生かし、さらに専門家の協力を得て脳を効率的に使う指導法も取り入れた。すると、利用者の一部の発達障害と診断された子に、さまざまな効果が見られたという。「最初は視線も合わさなかったのに、小学校を受験できるまでになった子もいた」。このことが、障害のある子どもたちへのデイサービスの発想につながった。

デイサービスでは、投げたボールをキャッチして距離感を養ったり、カードに記された数字を記憶したりして、空間認知能力や記憶力を向上させるプログラムなどを実施。児童福祉法に基づく障害がある未就学児が対象の児童発達支援事業の指定も受けている。

J1神戸で活躍する相馬さん（右）＝2012年3月、神戸市で

相馬さんは幼児教育の分野以外でも、障害者と関わりがあった。障害者アーティストの絵画を集めた「パラリンアート」のコンテストに昨年、Jリーグと日本プロサッカー選手



会が協力団体として参加しているが、その発起人が相馬さんだった。

3年ほど前、知人を通してパラリンアートに触れる機会があり「障害者が手掛けたと分からないほど素晴らしかった。何か役に立てないかと思った」。障害がある人がアートで夢をかなえる世界をつくることをテーマにした「パラリンアート」の事業に共感。作品の完成度に触発され、たった一人でリーグや選手会に支援できないかと掛け合った。

自身にとっても将来への「夢」は「なければ生きられなかった」という現役生活を支える原動力だった。日本代表に一步届かず、海外挑戦も成功とは言えなかった。それでも14年間をプロで過ごせたのは、常に夢や目標を掲げ、それに向かっていく強い思いがあったからだった。

相馬さんは、デイサービスの利用者や、パラリンアートの担い手の障害を、その人の個性と考えているが、現実には生活していく上でハンディになることもある。デイサービスを立ち上げた動機は、そこにある。子どもたちの「できないこと」を少しでも「できること」に変えていくことで、「将来の選択の幅を広げるお手伝いができたら」。そう思い、相馬さん自身も、新たな夢を追い続けている。

重度障害者の自立探る 仙台でシンポ

河北新報 2017年9月16日

「重度訪問介護」の利用が認められた経緯を説明する岩崎さん(中央)



重度の障害者が自立した生活を送れるよう、介護の在り方を考えるシンポジウムが14日、仙台市青葉区の市福祉プラザであり、障害者や家族ら約150人が参加した。介護保障を考える弁護士と障害者の会全国ネット(東京)の主催。

全身の筋肉が徐々に衰える難病「筋ジストロフィー」を患う詩人の岩崎稔さん(41)＝仙台市＝が、24時間体制で在宅介護を受けられる「重度訪問介護」の利用を勝ち取った経緯を報告した。

高齢の両親が介護に追われる現状に限界を感じ、岩崎さんは昨年9月、市に重度訪問介護の利用を申請。一度は断られたが、介護保障ネットの支援を受け、今年2月に認められた。

岩崎さんは「親に頼らず、自立した生活を送りたかった。近い将来、1人暮らしをしたい」と語った。

岩崎さんを支援した仙台弁護士会の木原知(さとる)弁護士は「弁護士が福祉の相談に乗る『サポネットみやぎ』を活用するなど気軽に連絡してほしい」と呼び掛けた。

命・人権守る社会こそ きょうされん 全国大会に2500人 札幌で

しんぶん赤旗 2017年9月16日

ステージ企画「共同作業所づくり運動・50年ものがたり」で歌声を披露する人たち＝15日、札幌市 障害者の社会参加、地域での豊かな暮らしをめざす、きょうされんの第40回全国大会が15日、札幌市で始まりました。当事者約750人、ボランティア約300人など、のべ2500人が参加しました。大会は16日まで。



開会あいさつで、西村直(ただし)理事長は「命

と人権がしっかりと守られる、安全で平和な社会づくりを歩んでいく決意を、皆で新たに確かめ合おう」と呼びかけました。藤井克徳専務理事が基調報告しました。

ステージ企画では、きょうされんの前身となった共同作業所づくり運動が50年を迎えたことにちなみ、最初の作業所ができた愛知県などから「50年ものごと」が語られ、全国各地の支部が歌声を披露しました。

精神科医の香山リカ・立教大学教授や北海道大学の上野武治名誉教授、金沢大学の井上英夫名誉教授、北海道新聞の佐藤一記者を講師に迎えた特別分科会「生きたかった～相模原障害者殺傷事件から1年の今を検証する～」には、会場いっぱいの376人が参加。

香山さんは、日本に差別扇動、排外主義がまん延していると指摘。「おそらく彼（植松聖被告）もそういった情報にアクセスし、染まっていたのではないかと話しました。

参加者は「たとえ寝たきりでも、生きているだけで命は尊い」「時間が平等のように人の命も平等だ」「事件を忘れず一人ひとりに考えてほしい」などと発言しました。

日本共産党の畠山和也衆院議員をはじめ、各政党の道選出国會議員が参加しました。

若年性認知症発症後は計約7割が「退職」「解雇」 “認認介護”も顕在化

産経新聞 2017年9月15日

認知症患者の就労のあり方をめぐっては、国内では手探りの状況が続いている。中でも、65歳未満で発症する「若年性認知症」の人々をどう支えていくかは大きな課題だ。

平成26年度に認知症介護研究・研修大府センターが行った若年性認知症の生活実態調査はその一端を示している。本人や家族から回答のあった383人を詳細に分析した結果、発症時に就労していた221人のうち、66・1%が仕事を「退職した」、7・7%が「解雇された」と答えた。

世帯の主な収入は「家族の収入」が約5割を占め、「本人の障害年金など」（34・5%）に頼らざるを得ない実態も浮き彫りに。家計状況は「とても苦しい」「やや苦しい」を合わせると約4割に達した。

24年時点で約462万人と推計される65歳以上の認知症高齢者やその家族への支援体制構築も急務だ。

厚生労働省の国民生活基礎調査（28年）によれば、介護が必要な65歳以上の高齢者がいる世帯のうち、介護をする人も65歳以上である「老老介護」世帯の割合は54・7%。同居する主な介護者が介護に要している時間をみると、「ほとんど終日」が要介護3以上で30%を超え、要介護5では54・6%に達した。

認知症の人が認知症の人をみる「認認介護」も顕在化しつつある。この言葉の名づけ親とされる「たかせクリニック」（東京）の高瀬義昌理事長は、「認認介護世帯になると『困っている』という状況の発信すら難しくなる。通常の生活を維持できず、衛生管理もままならない環境に置かれて、別の病気の発症や事件・事故に遭遇するリスクが高まる。社会全体で認知症に関する理解を深め、患者の孤立化を防ぐシステムを早急に整えなければいけない」としている。



LGBT 「本当の私」絵筆に込め「いじめ、逃げていい」 毎日新聞 2017年9月16日
個展の会場で来場者に自身の体験を語るこうぶんこうぞうさん＝神戸市中央区の神戸ポートピアホテルで12日

性同一性障害であることを公表し、性的少数者（LGBTなど）への理解を求める活動を続ける画家がいる。男性の体に生まれて女性として生きる、こうぶんこうぞう（本名・公文晃蔵）

さん（46）＝大阪市。いじめや自殺未遂を経験したが、絵との出会いに救われた。当時と同じ境遇にいる子どもたちに「逃げてもいい。どんな自分も好きになって」とメッセージを送る。

大阪府阪南市出身。幼いころから、好きになるのは男の子だった。スカートや口紅をせがみ、遊びはままごと。小学校入学時には、黒いランドセルを赤いペンで何度も塗った。

性同一性障害という言葉が知られていない時代。女の子のような仕草を同級生にからかわれ、教師には「男らしくしろ」と殴られた。集めた色とりどりのリボンやシールは、全て親に捨てられた。「男の着ぐるみに包まれた感覚」で生きていた。

自分を変えてくれたのは、中学の女性美術教諭。学校でただ一人の味方だった。「ロングヘアにしたい」と言うと、長い髪になった姿を描いてくれた。「絵の中では本当の自分になれる」。絵画教室にも通い、夢中になった。キャンバスだけが逃げ場所だった。

高校時代は学ラン姿ながら、顔には化粧をしていた。そんな姿が目をつけられ、激しいいじめの対象に。弁当はトイレにこもって食べた。「悪いのは私。居場所なんてどこにもない」。絵もやめさせられた。そして高2の時、うそをついて買った農薬を深夜に飲んだ。

1カ月以上も生死の境をさまよい、「怖いものがなくなった」と言う。「絵で食べていく」と決め、高卒後に家を出た。大阪市生野区の商店街で1枚500円の似顔絵を描き、アパートで朝まで絵筆を握った。

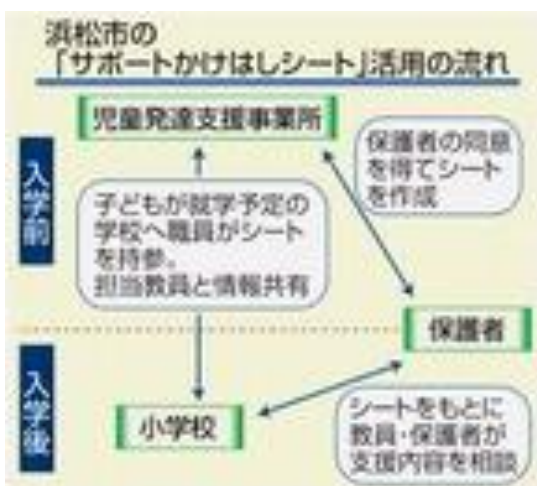
作品のモチーフは、ほとんどが子どもの顔。投影するのは、絶望していた自分や、望んでも産めない「我が子」だ。次第に評価が高まり、1996年には初の個展を開いた。

男性として生活していたが、カナダ人の恋人から「性同一性障害では」と指摘された。2003年からは公表して活動し、これまで30回以上の個展を開いてきた。最近は、関西の小中学校や教員の研修会で講演し、性の悩みを抱える子への理解を求めている。

近年、国内でもLGBTは知られるようになったが、命を絶とうとする当事者や、誰にも相談できない子どもたちが、今も身近にいる。「自分を追い込まないで。世の中はきっと変わるから」と力を込める。

10月1日まで、創作活動20年を記念した個展を神戸ポートピアホテル（神戸市中央区）で開いている。【茶谷亮】

発達障害児支援つなぐ 県内自治体、幼保や民間事業所などと連携



静岡新聞 2017年9月16日

小学校入学後の児童が学校生活になじめない「小1プロブレム」で、問題が顕在化しやすい発達障害児への支援に県内自治体が乗り出している。療育・自立支援を行う児童発達支援事業所や幼稚園・保育園などと連携し、必要な支援などの情報を入学前に引き継ぐ取り組みが目立つ。教員からは「学校生活の困難を取り除く手だてが取りやすい」と期待の声が上がっている。

浜松市では2017年度入学児童から、児童発達支援事業所と小学校が子どもの情報を共有する「サポートかけはしシート」の活用を開始した。事業所が保護者の同意を得て情

緒面や対人技能などについて記入し、小学校教員に手渡す仕組み。市によると、民間事業所に統一の書式で引き継ぎを依頼する例は県内でも珍しいという。

初年度は対象児童の約9割に当たる139人がシートを活用した。担当者は「支援の継続が安定した学校生活につながると保護者の期待も大きいようだ」と手応えを語る。中区

の公立小で発達支援教室を担当する女性教員も「直接事業所に説明を受けることで、席の配置や同級生との関わり方など、就学前に対応を考えられる」と話す。

県内の複数自治体が近年、保護者や幼稚園・保育園に未就学児の特性を記入してもらうシートを引き継ぎに活用し始めている。焼津市は既存の就学支援シートに加え、18年度から幼児期、小・中学校と継続的に子どもの情報を記録し、成長段階に応じた支援につなげる発達支援ファイルの配布も検討中。ファイルは保護者が保管し、子どもの障害と向き合う動機づけにしよう狙いだ。

同市の担当者は「シートやファイルなどのツールは配るだけでなく、どう活用するかが大切だ」と強調する。

■初体験の学習や集団生活に困難

読み書きや集団行動、コミュニケーションなどが苦手な発達障害児は、小学校で初めて体験する学習や集団生活での困難に直面しやすい。こうした事態を防ぐため、小学校教員が入学前に適切な支援を把握し、対策を用意する必要がある。

県幼児教育センターによると、教育的ニーズを持つ未就学児について、幼保一小学校間の情報の引き継ぎは県内小学校の9割以上で行われている。ただ、その手段は書類や口頭でのやり取りなどさまざまで、制度整備はまだ不十分という。

同センターの担当者は「幼保や学校任せではなく、どういう情報を引き継ぐべきかを自治体が定めておくことは重要」と指摘する。

伊予市の食事や土産はここで おもてなし地図が完成、観光スポットも紹介

愛媛新聞 2017年9月16日

愛媛国体・全国障害者スポーツ大会で伊予市を訪れる関係者らに食事や土産の店舗を紹介する「おもてなしまっぷ」がこのほど完成した。ポケットに収まる大きさで、地元推薦の食事どころなどを分かりやすく示している。伊予市の飲食店などを紹介した「おもてなしまっぷ」



市や企業などでつくる「食と食文化のまちづくり推進委員会」が1万部発行した。A6サイズの8ページ両面を使い、折りたためる。

広げると、旧伊予市と、双海・中山両地域で計58カ所の店舗がずらり。「旧伊予市内に多い」（市未来づくり戦略室）という中華そば店や、海岸部ではじゃこ天や魚料理、山間部ではクリの加工品などバラエティーに富んでいる。

ほかにJR下灘駅や五色姫海浜公園など観光スポットも盛り込んだ。同室の向井英樹係長（43）は「市内には食べる場所が少ないとよく言われるので、近隣市町や地元の人たちにも見てもらえれば」とPRした。

市役所本庁や双海、中山の両地域事務所のほか、ウェルピア伊予、花の森ホテルなどに置き、無料。市のホームページからもダウンロードできる。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行